

なめがたでキラリ輝く「ひと」

自然光に映える、恵美さんが作った籠や
ざる。自宅兼作業場



勢司 恵美さん (39歳)

Profile

竹細工職人。地元で採れたものを使ってものづくりをしたいという思いから、現在の仕事に携わっている。市内外で、竹細工教室やワークショップも開く。山田在住。

「職人と呼ばれるには、まだ経験も浅くて…」と、はにかみながら話す勢司恵美さん。行方市で生まれ育ち、いつか地元で「ものづくり」の仕事をしたという夢がありました。

「もともと環境問題に興味があったんです。日本にある昔からのもので地元で育ったもの、土に返る自然素材、採ってもなくならない、ものづくりの後継者が不足している…そんなことを考えていたら、竹は切ることでよって山の環境が整い、地元

の山にもたくさん育っている素材だということに気付いて。あらためて、竹で、ものづくりがしたい!と思いました」と恵美さん。

竹細工に使う材料は、近場の山から切らせてもらいます。山に入り、竹を切り出し、割って細く切り裂く…というように、籠やざるを編む材料作りからすべて自分で行っています。

「竹細工を始めるにあたって、東京都内の竹細工教室に半年間通いました。そこでは、大分県別府の竹細工を習いました。そのご縁もあり、思い切って大分県の職業訓練校へ入学することにしたんです。29歳のときでした」。恵美さんは訓練校で竹細工の基礎を学んだ後、そのまま大分で現地の職人さんの工房に通いながら、独学で竹の採伐方法や仕事の流れを覚えました。

「学校では主に工芸品を、大分の職人さんからはその地の昔ながらの形かたちの作り方を学び、やはり私は茨城で作られてきた形、地元の生活に根付いたものを作りたいという思いが強くなりました。行方市に戻ってから、地元の竹細工職人の吉田平たいちさん

(西蓮寺)の元で茨城の形を教えてもらいました」。

吉田さんから手ほどきを受けた恵美さんが今、竹細工職人の仕事として作りたいと思っているのは、昔から畑や台所で使われてきた「米あげざる」というものです。通称一斗ざる、五升ざるなどと呼ばれる生活用品を、地元の竹で作ることに挑戦したいと考えています。

「竹細工の魅力は、『一生勉強』なところですね。上を見ればキリがなく、ずっと勉強が続くのだと、これまでお世話になった職人さんたちも言っていました。ものづくりは、勉強しながら覚えていくもの。私も、いろいろなことに挑戦したい、作ってみたいという向上心を常に持っています」と話します。

今一番大変なことは、との問いに「もともとと勉強したいと思っているんですけど、目の前のことに精いっぱい、なかなか時間が取れなくて…。今は、竹細工などの日本の『良いもの』がブームですが、仕事として成り立つかと言ったら難しい。商品はたくさん数を作らないとならないので。でも私は、地元

である茨城の形を作り続けることを仕事としてやっていきたいです」としっかり前を見て答えられました。

「私は作家ではなく職人を目指しています。いつか自分から、『私は竹細工職人です』と名乗れるようになってほしいと思います」と、話してくれた笑顔が印象的でした。

スマホで読める! 市報なめがた デジタルブック配信開始!



- ブラウザでもアプリでも、スマホやタブレットで読める
- 7言語で読める
【日・英・中(簡体)・中(繁体)・韓・タイ・ポルトガル語】
- 音声読み上げもできる ○文字サイズを調整できる

Delivering e-book in English
电子书籍以中文简体字发布
電子書籍以中文繁體字發布
한국어 전자전송중

ในระหว่างการ จัดส่ง หนังสือดิจิทัล
Entregar e-book em Português



無料 FREE APP



▲このアイコンが目印

*ブラウザ版は音声読み上げには対応していません。音声読み上げには、無料アプリ(カタボケ)のインストールが必要です。